

火事

小川未明

青空文庫

季節きせつが、冬ふゆから春はるに移うつりゆく時分じぶんには、よくこんなような静しずかな、そして、底冷えそこびのする晩ばんがあるものですが、その夜よるは、まさしくそんな夜よるでありました。一家かは、いつものごとく時計とけいが十時じを打うつと寝ねにつきました。子供こどもたちは、二階かいへ上あがって、まくらに頭あたまを載のせると、すぐかすかな、健康けんこうで心地こころよさそうな鼻息はないきをたてていました。兄あにが十六、弟おとうとが十であります。電燈でんとうが消けされたから、二つのいぐり頭あたまが並ならんでいることは暗くらがりのうちではわかりませんでした。夜よるは、だんだん更ふけていきました。ブー、ウー、ウー、警笛けいてきの声こえです。まず、眠りねむからさまされたのが、兄あにの信しん一いっでした。まだ眠りねむがまぶたに残のこっていて、顔かお

を夜着よぎのえりに埋うめたまま耳みみをすましていました。

「風かぜがなくていいな。」と夢ゆめの中なかだけれど思おもつていたときです。

蒸気じょうきポンプの轆わだちが、あちらの広い通ひろりを横よこの方ほうへ曲まがったよう

です。たちまち、ジャラン、ジャランというベルの音おとが、すぐ近ちか

く、大きくきこえました。

「兄にいさん、火事かじだよ。」

弟おとうとの秀吉ひできちは、こういうと同時どうじに飛とび起おきて、障子しょうじを開あけ、

窓まどの雨戸あまどを繰くりました。

「真まっ赤かだ。」

「えっ、ほんとう。」

「そんなに遠とおくないよ。」

信一は、弟の背後からのぞくと、なるほど、星晴れのした空の

下に黒く起伏する屋根を越して、燃え上がる炎を見ました。さな

がら、赤いインキを流し散らすごとく、また惜しげなく投げられ

た金貨が燦然として飛ぶごとく、火焰は濃淡に夜の青ざめた

肌を美しく彩っていました。すると、焼け出された人々や、そ

の近所の人たちが、付近でうろうろしたり、大騒ぎをしたり

している有り様が、目に見えるような気がしました。

「叔母さんの家の方だね。」

「ああ、そうだ。叔母さんの家は、あっちだったね。」

「あの、すぎの木はどこだろう。」

こんもりとした常磐木の林の、片面だけが火焰に照らされて、

明^{あか}るく浮^うき出^でているのが見^みえました。

「どこの林^{はやし}だろう、あんな林^{はやし}があつたかな。あの高^{たか}い煙^{えん}突^{とつ}は、たしか駅^{えき}の方^{ほう}のお湯^ゆ屋^やだから、そうすると、叔母^{おば}さんの家^{いえ}は、やはりあのあたりだ。」

ふたりはなごえみみはい二人^{ふたり}の話^{はな}し声^{こえ}が耳^{みみ}に入^{はい}つたとみえて、お父^{とう}さんも、お母^{かあ}さんも、二階^{かい}へ上^あがつてこられました。

「僕^{ぼく}、叔母^{おば}さんの家^{いえ}へ、みまいにいつてきますよ。」と、このとき、信^{しん}一^{いち}が、いいました。

「だいじようぶだ。叔母^{おば}さんの家^{いえ}から、だいぶ離^{はな}れている。」と、お父^{とう}さんが、いわれました。

「かぜをひくといけないから、およしなさい。」と、お母^{かあ}さんも、

いわれました。

「だって、叔父さんがお留守なので、叔母さんが心細いだらう。」

信一は、もう洋服に着かえていました。だれがなんといつても自分は、いかなければならぬという堅い決心をようすにみせて、二階から駈け下りました。

この時刻には、ポンプの走る音が方々でしていた。けれど火の手は、なかなか衰えそうにも見えなかったのです。先刻までまったくなかった風が、意地悪く出はじめて、寒気が募り、長く北窓を開けてはいられませんでした。

門の外で、チリリンと鳴らしたベルは、信一が、物置から自

てんしゃ
転車を引き出して、いま乗っていったのでありました。

一家のものは、ふたたび床の中へ入りました。しかしお父さんは、信一が帰ってくるまでは眠られなかった。つい数分間前まで、平和で、何事もなかった夜であつたが、急に思いがけぬでき事のために、みんなが眠りを破られ、そればかりか内と外と、ちりぢりになつて、こんな心配をしなければならぬというのはどうしたことだろう、と、お父さんは思つたのでした。

「あの子は、もうこの家に私たちといっしょにいたのでない。どこか離れた町の中を群集に足を踏まれたり、もまれたりしているのだ。よく人生は、一寸先はわからぬというが、このことであろう……。」

昔、^{むかし}読んだ^よ小説^{しょうせつ}には、やはりそんな筋^{すじ}のものがあつたことを思い出して、お父さん^{とう}は、じつとしてまくらに頭^{あたま}をつけていられたのでした。たびたび、寝返^{ねがえ}りをなさつたとき、
 「あの子^こは、けがでもしなければいいですがね。」と、突然^{とつぜん}お母さん^{かあ}が、そばからいわれました。お母さん^{かあ}もやはり眠^{ねむ}られぬとみえました。

「ばかなやつだ。いくなといつたのに……。」
 おんな^{おんな}なこども「女と子供ばかりだから、心配^{しんぱい}だつたのでしよう。」
 お父さん^{とう}は、自分^{じぶん}が子供^{こども}の時分^{じぶん}、火事見物^{かじけんぶつ}に出かけて、消防^{しょうぼう}夫^{うふ}や、巡查^{じゆんさ}に追^おいたてられて、ぬかるみを右往左往^{うおうさおう}した有り^あ様^{さま}を思い出^だしました。それでも、なるだけ危険^{きけん}を冒^{おか}して、近^{ちか}くま

でいつて火事を見るのが好きであつた。そして、新たに燃え移るたびに、火焰は、群がったやじうまたちの顔を鬼のように、紅く染めるのでありました。

「あいつ、あぶない場所に立っていて、自動車にでも、はね飛ばされなければいいが。」と、お父さんは信一が帰ってくるまでは、心配が絶えなかつたのです。

弟の秀吉は、よく眠っているとみえて、二階はしんとしていました。宵のうちはみんなが話をしていた茶の間の、柱にかつている時計は、やがて二時を打ちました。お父さんは、ますます目がさえるばかりでありました。

風の、窓に当たる音がしたと同時にでした。ベルのチリンと鳴る

音がして、自転車じてんしゃが家の前まえに止まるけはいがしました。

「信一しんいちが、帰かえってきたな。」

お父さんとうさんは、息子むすこが帰かえつたと知しると、急きゆうに気持きもちちが軽かるくなるのを感じかんしました。

やがて、玄関げんかんの戸とに、かぎをかけて上あがつてきた信一しんいちは、両り親ようしんの寝ねていられるふすまの外そとに立たつて、

「ただいま。叔母おばさんの家いえからだいぶ離はなれていましたから、いきませんでした。三軒けんばかり焼やけて、やつといましがた消きえました。」
「いいいました。」

「それで、おまえはどうしたのだ。見物けんぶつしていたのか。」と、お父さんとうさんは、穏おだやかな調子ちようしで、おききになりました。

「僕ぼくですか、見物けんぶつじゃありませんよ、消防しょうぼうのてつだいを
しました。自転車じてんしゃを他所よその家いえへ預あずけておいて水みずを運はこんだのです。
隣組となりぐみでやるバケツのリレーは、あわてるときは、だめですね。
途とちゆう中ちゆうで水みずがみんなこぼれてしまつて、いざかけるときには、ほ
とんどバケツの中に水みながはいっていないのです。それに、火ひは、
どんどん勢いきおいよく燃もえ上あがるのでしよう。僕ぼくたちは、家いえの前まえに、
防火用ぼうかように置おいてある、水みずの入はいつた四斗とだるを三人にんで運はこびました。
あんなときは、不思議ふしぎに力ちからが出でるものだと自分じぶんでも驚おどろきました。
お蔭かげで、大事だいじな洋服ようふくが、ずつぷりぬれてしまつたから、明日あしたお
母かあさんに乾ほしてもらいます。」

信一しんいちは、笑わらいながら、こういう終おわらぬうちに、はや二階かいへ上のぼ

りかけていた。

「ほかに、見物けんぶつしているやじうまもあつたろう。」と、お父とうさんは、おききになりました。これに對たいして、しばらく返事へんじはなかつたが、

「あまり、ありませんね。みんないっしょになつて、働はたらいていますよ。」

「ああ、そうか。」
「お休やすみなさい。」

こんどは、信一しんいちは、元氣げんきよくいつて、トン、トンと、はしご段だんに足音あしおとを残のこしながら、上のぼつてしまいました。それから弟おとうとと話をなする声こえがしたかと思おもうと、そのうち二人ふたりとも眠ねむつたのであろう、

しんとしてしまった。ただひとりお父さんだけは、いつまでも眠ら
れませんでした。

「たしかに、世の中は、変わった。子供もちがったようだ。昔は、
たとえ他人は、どうあろうと、自分さえよければいいと思ってい
た。なんという恥ずかしいことだったろう……。」

お父さんは、青ざめた、明け方近き空を吹く風の音を、まくら
に頭をつけたまま、聞きながら、心を遠方にはせていらしまし
た。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「山野に鍛へる少国民」

1942（昭和17）年4月

※表題は底本では、「火事《かじ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火事

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>